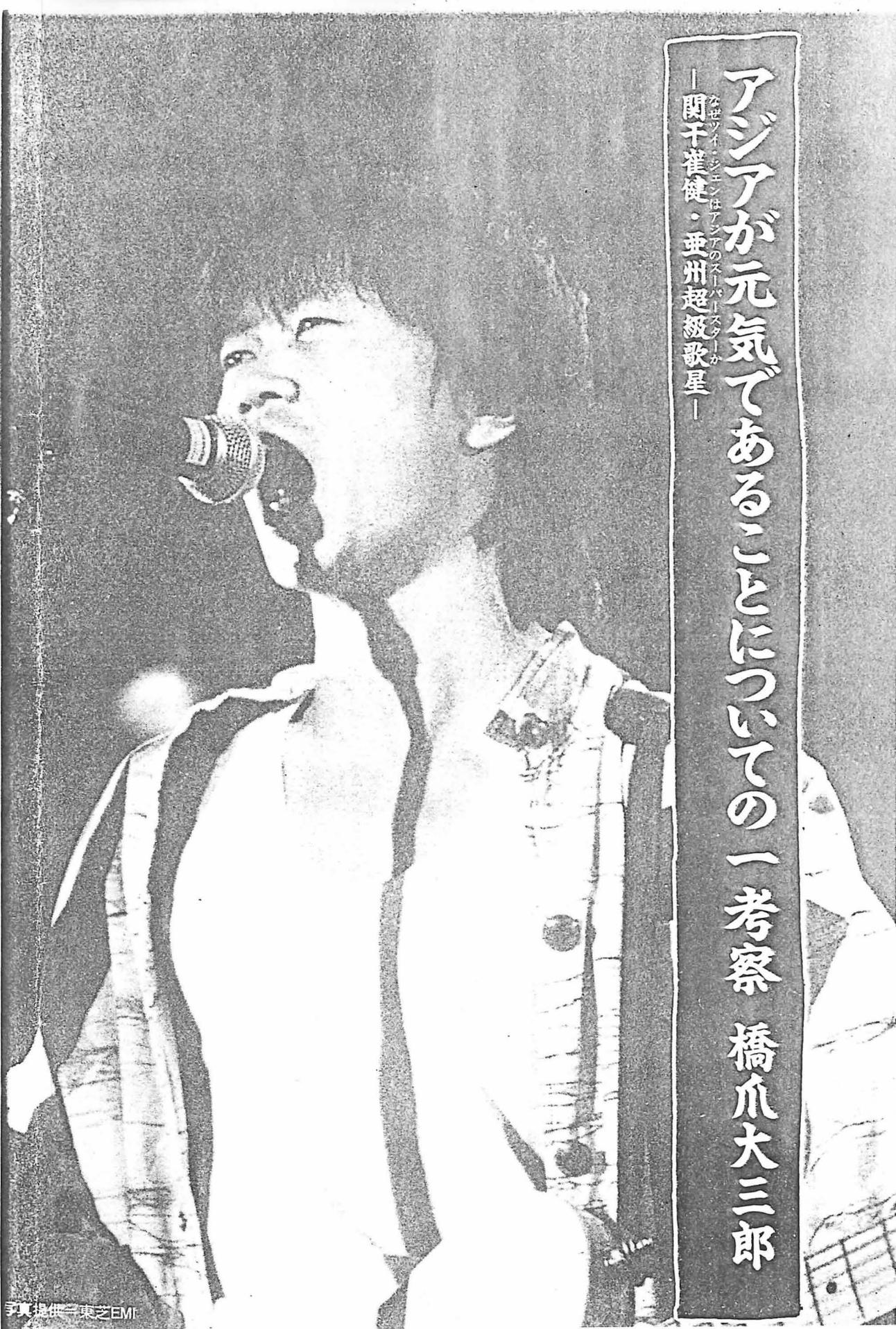


アジアが元気であることについての考察 橋爪大三郎
— 関千雀健・亜州超級歌星 —



アジアが元気だ。それこそ、元氣一杯だ。

……というところは、サントリー烏龍茶のウ・フ・フCMを観て、やっぱり中国の娘さんはスタイルもいいし綺麗だなあなんて思わなかったって、ナンパオ赤黒軍団・人海戦術の迫力に圧倒されなくて、誰だって最近ひしひしと感じているはずだ。スーパーで衣料品のラベルをめくれば中国製。ヤオハンも伊勢丹も、A I W Aもトヨタもシャープも三菱も、ほとんど中国大陆へ進

出している。中国を先頭とする東アジアに、世界経済の重心がいまちようど移ろうとしている。

それにひきかえ、日本は元気がない。景気はだんだん上向きかけているというものの、バブルのころのはしゃぎぶりが嘘みただ。リストラで失業も人ごとでないし、空洞化におびえて投資も冷え込んだまま。先の見えない時代がこれからも続くことに

なる。

戦後五十年、調子よく繁栄の一本道を歩いてきた日本は、とうとう曲がり角を折れてしまった。アジアが元気で、指をくわえて見なければならぬ。——ポスト冷戦時代は、そんな辛い時代になりそうだが、どうしてこんなことになったのか？ 何がいままでと違ってしまったのか？ それをきちんと理解して、これからの時代の「傾向と対策」にしよう。

アメリカが、日本との関係を「見直し」はじめた



冷戦が終わるとどうなるのかわかるためには、冷戦とはなんだったかを、振りかえってみる必要がある。

まず、アメリカにとって冷戦は、予想外のことだった。

マルクス・レーニン主義は、資本主義を打倒することを究極の目標にしているから、ソ連(など社会主義諸国)がアメリカに敵対するのは、マンダースが蛇に噛みつくのと同じくらい当たり前のことである。ところがアメリカのルーズベルト大統領は第二次大戦中、ソ連と協力してヒトラーのナチ

ス・ドイツと戦っているうちに、そのことをうっかり忘れてしまった。気がつけば、ヨーロッパの東半分はソ連の衛星国に。おまけにアメリカに遅れること数年、ソ連も原爆を開発し、とうとう米ソ両国は、世界最終戦争を覚悟して睨み合うことになったのだ。

もうひとつあてが外れたのは、中国が共産主義国家になってしまったこと。

日本が中国に攻め込んだので、共産党と国民党は喧嘩をやめ(国共合作)、一緒に

日本と戦った。それをアメリカが、かげで応援した。日本が降服したあと、また内戦となってしまう。アメリカは毛沢東の共産党を甘くみて、蒋介石の国民党をずるずると支持し続けるうちに、とうとう中華人民共和国が成立。国民党は命からがら台湾に逃げ出した。中国大陸がまるごとソ連の影響下に入るといふ、アメリカ外交の大失敗である。

これに追い打ちをかけたのが朝鮮戦争。金日成の不意打ちを喰って、もう少しで朝鮮半島を失うところだった。こんな調子で

どんどん共産主義が拡がってはかなわない。そこでダレス國務長官は、ドミノ（将棋倒し）理論を唱え、自由世界の国々、たとえば韓国や日本に、共産主義の勢力が入り込むことを、どんなことがあっても阻止すると決意した。独立したあとの日本に米軍基地を置き、日米安保条約を結んで日本を守ることにしたのは、その一環である。

こう決めたからには、日本の首相が少しぐらい頼りにならなくても、デモ隊が国会の周りで騒いでも、アメリカは気にしない。アメリカの要求は、

①憲法を守って、議会制民主主義をきちんと運営すること。（ただし、形だけでもいい）

②経済が繁栄すること。（石油がいるなら売ってやる、製品が売れないなら買ってやる）

③それ以外のことも、おとなしくアメリカの言うことをきくこと。（反米ナシヨナリズムの政権は許さない）

の三つだった。①は、アメリカ国民を納得させるため。②はいわば、社会主義諸国へのあてつけだ。日本が戦後、順調に経済成長をとげ、戦前の水準を追い越したばかりか、アメリカに次ぐ世界第二の「経済大国」の地位にのし上がったのも、アメリカ

世紀の初めに逆戻りするようなものだ。

そこでアメリカの世界戦略とは、

①これまでの米ソ対決を前提にした、米軍の「常時全面展開」（世界中にアメリカ軍を配置して、戦争に備える）をやめて、「有事即応展開」（ふだんはアメリカに待機していて、何かあったときだけ湾岸戦争のときみたいに駆けつける）に切り換える。

②ブロックごとに、適当な国をみつめて、アメリカの肩代わりをさせる。

ということになる。①は安上がりだから、アメリカも助かる。②は、ヨーロッパならドイツ、旧ソ連ではロシア、そしてアジアでは日本が候補にあがっている。ドイツや日本を国連の常任理事国に加えることにアメリカが前向きなもの、そういう狙いだ。

日本やドイツが常任理事国に加われれば、国連の性格は、根本的に変わってしまう。

国連は英語だと「ユナイテッド・ネーション」、つまり「連合国」という意味。第二次大戦をともに戦った、反ファシズム連合軍がたちを変えたものである。国連の安保理・常任理事国の椅子に坐る五大国（米・英・仏・ソ・中）は、戦勝国を代表して、戦後の世界秩序を取り仕切る。ファシズムが息を吹き返したらもう一度やつつ

のこうした政策のおかげである。

こうしたアメリカの態度に、日本は最初とまどったが、そのうち慣れてしまった。そして「アメリカはきつと、日本のことが好きなんだ」と思い込むようになった。

アメリカが日本を重視したのは、アメリカの世界戦略があるからである。アメリカは、自由世界を守る唯一の超大国としての使命と責任を感じていたから、少々無理をしても、援助を惜しまなかった。それにベトナム戦争の頃まで、アメリカの国力は、なんとと言っても圧倒的だった。そして、東アジアの近辺には、日本のほかに適当な国が見当たらない。本音を言えば、アメリカは日本のやり方に業をにやしたり腹を立てたりということがしょっちゅうだった。そろそろ愛想をつかしかけていたところに、冷戦が終わってしまったわけだ。

アメリカの日本に対する見方は、年を追って厳しさを増している。

八〇年代になって、日本見直し論者（リビジョニスト）たちが現われ、「日本はズルい」「日本の市場は閉ざされている」「フェアでない」などと騒ぐようになった。彼らは、アメリカ人の漠然としたもやもやを代弁した。言われてみれば、その通りである。そこでこの数年、アメリカ政府は、湾

けるという「敵国条項」があることからわかるように、国連の本質は、第二次世界大戦の戦後処理機関なのだ。

そんな国連に、日本が入ってしまったのがそもそも変である。従来の政府見解では、日本国憲法は集団自衛権を認めない（軍事同盟を作ってはいけない）ということだったが、国連はそれを認めている。そもそも国連が、軍事同盟そのものである。だから国連が戦争を始めて、日本に「軍事的貢献」を命じることがありうる。現に湾岸戦争のときはそれに近いことになって、日本は苦しい立場に追い込まれた。そんな国が常任理事国になれば、ますます矛盾が深まるばかりである。

とにかくそんな日本やドイツが、国連の常任理事国になれば、国連はもはや「第二次大戦の戦後処理機関」ではありえなくなる。そのかわり、ポスト冷戦時代を取り仕切る、新しい性格の国際機関に生まれ変わる。その常任理事国は、ヨーロッパ、アジア……といった地域ブロックの代表ということになる。

こうした役割をどこまでちゃんとこなせるか、アメリカはいま日本を観察しているところだ。そして、中国についても、じつと目をこらしているところだ。

岸戦争の代金を日本に払わせたり、市場開放の数値目標をつきつけたりして、日本ともつとドライに付き合おうという態度に出始めた。

この背景には、ポスト冷戦の時代を迎えたアメリカの、世界戦略の変化がある。

アメリカにしてみれば、半世紀も続いた冷戦こそ、異常な時代だった。やっとそれが終わって、正直ほっとしているところだ。もう誰も、自由主義市場経済に正面から反対する者はいなくなった。中国やロシア・東欧を含め、世界は単一の市場を形成しつつある。自由世界のリーダーとして、共産主義の脅威に睨みをきかせる必要はなくなった。

しかし、「単一の市場」がすんなり実現するかと言うと、そうはいかない。実際には、世界のブロック化が進行しつつある。ヨーロッパはEC。北米にはNAFTA。旧ソ連には独立国家共同体。そして、アジアではAPECが、大きな存在として浮かび上がっている。冷戦の二極世界にかわって、ポスト冷戦の多極世界（ブロック化世界）が登場しつつある。

多極世界のなかで、アメリカは「唯一の超大国」ではなく、「並みの大国」としてふるまえばいいことになる。ちょうど二十

鄧小平の中国は改革開放路線、すなわち市場経済の道を進むことをはっきりさせた。あとまだ「共産党の一元支配」が残っているわけだが、これもいつまで続くかわからない。とにかく中国大陸に、自由主義の経済・社会体制を根づかせたいという、第二次大戦以来のアメリカの希望が、少しずつ実現する方向に向かっているのは確かだ。アメリカは昔から、日本よりも中国のほうを重視してきた。と言うと言いつきに聞こえるが、本音はそうなのだ。だから中国の独立が脅かされると、日本との戦争を辞さなかったのだ。冷戦が続いていたあいだは、中国と交流できなかったから、仕方なしに日本とだけ付き合い合っていたのだ。

だから冷戦が終わって、中国が本格的に台頭してくると、アメリカはだんだん昔の態度に戻っていくだろう。ということは、日米安保条約が打ち切られたり、米中軍事同盟が結ばれたりする日が来てもおかしくない、ということだ。もちろんアメリカは、アジア情勢が複雑なこと、アジアに安定が必要なことわかっている。そこで実際には、中国と日本とを互いに牽制させ、うまくバランスさせようとするだろう。こんな米・中・日の連立方程式を、うまく乗り切っていくヴィジョンと見識とを、日本人は持てるだろうか？

いまのままでは日本は、どっちつかずのコウモリだ



子供のころ、誰でも一度は読んだことがあるだろう。「鳥とけものが戦争をしました。鳥が勝ちそうになるとコウモリは、空を飛べるから鳥です」と、鳥のところへ行きました。けものが勝ちそうになると、「毛が生えているからけものです」と、けものところへ行きました。鳥とけものが仲直りをしました。そうしたらコウモリは、誰にも相手にされなくなりました……」

「脱亜入欧」をスローガンにした日本は、ヨーロッパが勝ちそうになったので、あわててアジアを見限ったコウモリでなくて何だろうか。

ポスト冷戦時代になって、アジアを踏みつけにできた日本の過去が、改めて問題として浮かび上がってきた。

それはなぜかという点、第一に、東アジア経済が急成長をとげたため。韓国、台湾、香港、シンガポールの「アジアNIEs」がまず先頭を走り始め、続いてマレーシア、タイ、ベトナム、インドネシアなどの東南

中国、韓国を例にとってみよう。

江戸時代の日本は、西欧世界にはほとんど知識も関心もなかった。文明の中心は中国にある、というアジアの伝統思想が、日本を支配していた。この当時の通念による、

中国V韓国V日本

というのが、文化的な価値序列である。中国があくまで世界の中心。巨大な世界帝国だ。そのつぎは、朝鮮。真面目に中国の哲学（儒教）や社会制度（科擧）を取り入れた、優等生である。それに比べると日本は、家族制度も儒教の原則の通りでないし、武士（学問のない軍人）が支配者に収まっている、という野蛮な国だ。儒教の序列を借りて言うと、父II中国、兄II朝鮮なのであり、この両国が、下の弟II日本を指導するという関係である。日本はこの関係を、うとうとうしく思っていたが、正面きって反対したことは一度もなかった。

ところが、その日本が、手の平を返すように、朝鮮、中国を見下す態度を取り始めた。西欧文明という、新しい手本を見つけたからだ。これが、朝鮮、中国には許せない。西欧に学ぶのはいいとしても、昨日までの両国に対する尊敬はどこに消えてしまったのか？ 福沢諭吉のとなえた「脱亜入欧」は、明治維新以後の多くの日本人の選

アジア諸国、さらには本命の中国が、猛烈なスピードで追い上げていく。この調子で行けば21世紀初めに、この地域だけで世界GNPの半分以上を占めることになるだろう。

第二に、さっきのべたように、世界のブロック化が進むだろうこと。東アジアに出来る上がるブロックの性格を端的に言えば、「大中華経済圏」なのだ。人数や経済力から言っても、この地域の文化伝統から言っても、ブロックの中心にはやはり中国がふさわしい。日本はあくまでも、その周辺にとどまる。

こうなると、日本の立場は微妙だ。

明治日本がいち早く近代化できたのは、伝統を無原則にかなぐり捨てることができたからだ。民族の固有文化や儒教の教えに忠実だった中国・朝鮮は、そのぶん出遅れてしまった。日本はそこにつけ込み、これらの国々を踏み台にして、列強への道を歩んだ。戦後もアメリカ一辺倒だった。こうしたやり方は、アパルトヘイト（黒人隔離

扱でもあった。日本人は軍事力を背景に、朝鮮を併合し、中国に襲いかかった。こうした植民地支配や戦争の悲惨さに加えて、プライドまでもが深く傷つけられたために、日本の過ちを許せないのである。

ただ、朝鮮、中国を別とすれば、日露戦争のあとの日本の評判はわりによかった。欧米世界以外の国、アジアの新興国が、はじめて列強の一角ロシアを打ち負かしたのだから、列強の支配に苦しむ第三世界の植民地の人びとは喜んだのも無理はない。日本は決して、アジア解放のために戦ったわけではない。でも抜け目なく、この評判を利用した。そして、アジアの解放戦争とか、大東亜共栄圏とか言っているうちに、自分でもだんだんそんな気がしてきた。ところが、フィリピン、シンガポール、インドネシアなどを占領した日本は、欧米諸国もやらなかったようなメチャメチャをやった。要するに日本は、アジアの解放を本気で考えたことは一度もないのである。

こうした憎悪や反目でスタスタに分断されているばかりか、もともとアジアは、共通の文化的基盤を持っていない。

そもそも「アジア」というくり方が、ヨーロッパ人のものである。トルコ半島の

政策）下の南アフリカで、「名譽白人」扱いはされていい気になっていた感覚と、ちっとも変わらない。

いままでもアジアの国々をないがしろにしておいて、急に「アジアの時代」だから仲良くしましょうと言いついて出しても、信用されるはずがない。

たしかに、ヨーロッパの国々も、さんざん戦争を繰り返してきた。普仏戦争のように、怨念が怨念をよび、おびただしい血を流した宿命の構図もある。けれどもヨーロッパの場合、それぞれの国家・民族は、どこかで互いに対等なものと認め合っている。それは、キリスト教という共通の基盤があるからだ。

これに対して、日本がアジアを舞台に繰り広げた戦争は、アジアの人びとの心に大きな傷を残した。それは、日本人がアジアの国家や民族を、自分と対等なものとは決してみなさなかつたからだ。アジアの人びとは、プライドをひどく傷つけられた。

ことを「小アジア」というが、ヨーロッパから見てアジアとは、トルコや中近東一帯のことだった。ユーラシア大陸のうちキリスト教徒の住んでいない部分を、アジアと言ったわけである。その範囲はだんだん東に広がって、中国や日本も含むようになった。そこには、インド、中国などいくつかの文化圏はあったかもしれないが、アジア全体に広がる文化など成立したためしはなかったのである。

日本人がアジアというときイメージするのは、こうしたアジアの実態とはとりあえず無関係な、架空の理想像である。それは、大東亜共栄圏とそっくりだ。日本は、「欧米先進国の一員である」という自信を持って、なくなったときに、その裏返しとして、「アジアの一員である」と言い出したがる場合があるのだ。

現在、経済ブロックとして登場しつつあるのは、東アジアである。その内実は「大東亜共栄圏」、つまり、中国人のネットワークを軸にしたまとまりだ。日本は勝手に「アジアの一員」「アジアはひとつ」というイメージを描いているが、そこに日本人が入れてもらえない保証はない。

日本人が「アジア」と言う場合、自分たちがイニシアティブをとることが、なんと

なく前提になっている。大東亜共栄圏の昔も、アジアブームの最近も、そうなのだ。そしてそれは、なぜかというところ、西欧文明を一番熱心に真似して成功したのが日本だから、というのである。

なぜ私は、崔健に注目するのか

ここで話は、音楽に飛ぶ。

最近、中国のロック・スター崔健(ツイ・ジェン)を紹介する本を書いた(『崔健——激動中国のスーパースター』岩波ブックス)。そうしたら、大勢の人びとからこう聞かれた、「どうしてまた、崔健に興味をもったんだい?」。これには「趣味でね」と答えることにしているが、よく考えれば、これは興行きの深い問題だ。

これまで、中国でどんな音楽が流行っているかなんて、みんなあまり注意しなかった。なぜかと言えば、アメリカの音楽産業が、中国に注目していなかったからだ。

戦後の日本文化は、アメリカの圧倒的な影響を受けた。圧倒的な影響と言っても、けっしてアメリカを理解したり、アメリカ

しかし、こういう中途半端な態度でいくら「アジア」と言っても、韓国や中国や、東南アジアの人びとは本気にしないだろう。それは日本が、この地域の人びとを対等な仲間と認め、その文化を深く理解しようとする



の価値観を受け入れたりしたわけではない。ただ、アメリカのものなら何でもいい、と思っただけである。「アメリカの物量作戦に負けた」が戦後の日本人の口癖だったが、日本の文化などアメリカの文化に比べれば大したことがないと思われ知らされたのが、本場のところだった。

音楽についても、このことは言える。進駐軍(主としてアメリカ軍)がやってきて、ジャズやダンス音楽を日本中に流行らせた。そのあとも、アメリカで流行るものならだいたい何でも流行った。アメリカの音楽産業は、ルンバやマンボ、ボサノバやレゲエなど、世界中から美味しそうな音楽の材料を集めては料理し、世界中にばらまくのを商売にしている。特にロックは、コカコーラやハンバーグとおなじに、世界の若者

しないからだ。そもそも、過去のあやまちに目をつぶり、謝罪も補償もしないのは、仲間に対する態度だろうか? 日本が仲間に入れてもらえないとしたら、それは日本のこうした態度に原因がある。

の共通言語になった。日本の若者もプレスリーの時代には、アメリカでいま流行っているのは何かとヒット・チャートを気にし、ロックやパンクの時代にも、アメリカで流行ったものならいちおう耳を傾けた。

こういう傾向が変化しだしたのは、八〇年代になってからだ。

最初に、エスノとか、エスノ・ポップとか呼ばれるジャンルが生まれた。海外旅行のお土産に買ったカセットを、聴いてみたら面白い。エスニック料理店がぎぎぎ開店したあたりから、耳なれない音楽に出くわすことが多くなった。はじめはただのエキゾティシズム(もの珍しさ)にすぎなかったものが、それなりに根づいていく。八〇年代の後半にはこれが、ワールド・

ミュージックと名前を変えた。世界各地のさまざまな固有文化を、対等な耳で評価しようという潮流となる。消費社会の差異化のゲームが音楽に及んだ(こんなの、聴いたことないだろ)とも理解できるが、大量生産一本槍で伸びてきたポピュラー音楽産業が、行き着く果てで迎えた転機だったとも言える。

九〇年代には、アジアン・ポップスが脚光を浴びる。ワールド・ミュージックをいろいろ聴いてみて、やっぱりアジアの音楽がなじみがいいと思っただ人が多かった。香港・台湾や東南アジアでは、日本のカヴァー曲もいろいろ出ているし、歴史的・経済的なつながりも深い。それやこれやで、台頭する東アジアへの関心が、ポピュラー音楽の世界でも大きな流れになりつつあるのである。

さて、中国のポピュラー音楽を聴いていると、あべこべに日本のポピュラー音楽のことを考えさせられる。

日本は、売上げ高世界第2位の音楽大国だが、不思議な特徴をいくつか持っている。まず、国産の音源を消費する割合が、とても高い。六〇年代には邦楽/洋楽の区別があり、歌謡曲や演歌のような邦楽は、外国の音楽やカヴァー版のポップスよりも一段

低いというような意識が残っていたが、そのあとは日本人の作曲家も器用になって、垢抜けた洋風の曲を作るようになった。ちよほど自動車や輸入↓ライセンス生産↓純国産と進んでいったように、音楽も純国産への道をたどった。外国の音源もむろん聴かれているが、購買層の主力が低年齢にかたよっているため、売上げに占める割合は大したことはない。

第二に、国産の音源は、欧米市場にまったく受け入れられない。半世紀のあいだにヒットしたのは、坂本九の「スキヤキ」だけというありさまだ。これは、日本のポピュラー音楽家たちが、欧米市場でアーティストとしてほとんど評価されていない、ということの意味する。こういう現象は、音楽に限らず、哲学や文学や思想の分野でも同様だ。

東京のレコード店は、世界の音源がより取りみどり、なんでも手に入る天国である。だが、この市場を支配する感性・この市場で育つアーティストは、世界に通用しないのだ。外のものが入ってくるが、中のものは出ていかない。そういう目に見えない壁(日本語の壁をそれに加えてもよいであろう)が、日本を包んでいる。

このように日本の市場は閉鎖的なのだが、

目をアジアに転じると、話はちがってくる。まず、中国をはじめアジア各国では、日本産の音源が受け入れられている。カヴァー曲が沢山作られ、もともと日本の曲であるとは必ずしも意識されないまま人びとのあいだに広まっていく様子を見ると(同じ現象は、欧米諸国では見られない)、日本の音楽はもっぱらアジアの人びとの心の琴線にふれる構造をそなえているのではないかと、とさえ思われてくる。

ただ、こういう現象はいまのところ一方通行だ。アジアのヒット曲のカヴァーが日本で作られ、それがアジア産と意識されないまま広まっていくという例は、まだない。アジアン・ポップスを聴いて「やっぱり、ほっとするなあ」と思うファンは、まだまだ少数派である。それに、これは「脱亜入欧」と関係があるが、日本人はアジアをモデルにしないと決めていたから、大半の人びとはアジアの音楽と聞いただけで興味を失ってしまうのだ。

それでも、アジアには可能性がある。日本を包む目に見えない壁(感性の垣根)が、東アジアの一帯では低くなっている。ここなら、アーティスト同士の対等で刺激的な関係が築けるかもしれない。

そういう可能性が目の前にぶら下がって

読書

自分を活かす思想・社会を生きる思想



自分を活かす思想
社会を生きる思想
竹田青嗣
橋爪大三郎
(経書房・245頁・
1,854円)
ただだ・せいじ 47
年生まれ。明治学院大
教授。はしづめ・たい
さぶる 48年生まれ。
れ。東京工業大助教授。

てくることはある意味で自然で合理的でもあるが、市場原理の優位性・権力ゲームよりエロスゲームといったキーワードは、実は近代西欧で既に指摘された言説に含まれており、むしろ問題はなぜ日本でこうした自然な提言が今声高に叫ばれる必然性があるのか、ということだろう。現に竹田氏も「僕らがいま言っていることは、十年くらい前だったら右翼反動の言説とすね」と言う。それだけ戦後日本の思想界でクラウド・オリーの圧力が大きかったということだろうか。

学界や思想界でも最老による抑圧体系が残っている面があり、両氏の共有する新しい基礎が定着するには、いさし時間が要するかも知れない。ただ思想という哲学というも人々の生活実感に根ざしたものと無関係であり得ない以上、古いオロキーは確実に築き死に向かい、新しいパラダイムが若い人々に受け入れられていくだろう。両著者より古い世代の私が両氏に多く共鳴する点があるのは、別に先見の明があったからではなく、単なる好みの次元にすぎないかも知れぬが、ともかく近ごろ創造の熱気に溢(あふ)れたさわやかな著書だと思った。

国家・教育・宗教… 創造の熱気示す対論

大衆に「解放」という幻想をふりまき革命を標榜(ひょうぼう)してきたオロキーが破綻(はたん)した現在、両氏のような著者が若い世代から出

冷戦構造をクラウド・オリーが解体したあと、全英闘世代の研究者からポストモダンに代わる新しい思想のパラダイムが提出された。それら中堅思想家のうち一方を代表する両著者が、国家・教育・宗教といった個人と社会にかかわる問題について対論を行い、三年の歳月をかけてとりまとめられたのが本書である。とくに竹田氏は在日朝鮮人という被差別の立場を自らの思想の根柢としながら、単なるルサンチマンの表出に陥らず人間の生を肯定的にとらえ、共生の哲学を説くユニークな評論家で、私は哲学思想に不案内ながらかつて氏の説に深い感銘を覚えたことがある。一方の橋爪氏はといえば、旧著『現代思想はいま何を考えればよいのか』において従来の社会科学の基本的枠組みをひっくり返してみせた人であることは記憶に新しい。その言説にはもちろん賛否の音がまじまじだが、新しい哲学の登場を実感させられた。

評者・今谷 明

竹田青嗣・橋爪大三郎著

アジアと和解できるかどうかを占うことができる。

六年間、中国のポピュラー音楽を聴いてきて、やはり一番だと思ったのが崔健だ。彼のアルバムは、日本でもみな発売された(『俺には何もない』『解決』『ポールズ・アンダー・ザ・レッド・フラッグ』……)いずれも東芝EMI)。生い立ちや創作の秘密については、この10月の来日公演に合わせて出版した『崔健』に紹介しておいた。だから日本のみなさんも、崔健の世界に誰でも手がとどくようになったのだ。

欧米音楽や市場経済の強烈な洗礼を受け、そのなかで、自分独自のものをどうこしらえようかと格闘している点で、崔健の置かれている状況は、日本のアーティストとも似通っている。社会主義の国柄でロックをやる厳しさ、政治との緊張関係は、日本にない中国だけの困難である。それらによく耐え、自分の持場でがんばっているところが、崔健の素晴らしさだ。これだけ才能と気骨のあるアーティストは、日本でみつかりそうにない。

彼の音楽は、たしかにロックなのだが、いわゆるロックの枠を超えたところがある。ロックもジャズもラップも、なにもかも、

ジャンルにこだわらずいっしょくたに聴いた。そのあと、彼の感性を通り抜けて、中国のいまを表現する作品に生まれ変わった。彼は、商業的な成功をみずから求めたこともないし、政治や通念に妥協したこともない。そういう彼の思想性が、ロックという形式とじっくり噛み合っている。

こういうロックが中国で出来上がったことに、私は感銘を受けている。どこからどう聴いても、それは中国でしかできないロックなのである。おなじような必然でもって、日本人は、日本にしか生まれないロック、日本にしか生まれえないポップスをいくつか生み出したろうか。——崔健を聴くたびに、そんなことを考えてしまう。

崔健は、「社会主義市場経済」を掲げなければならぬ必然を背負った、中国のロックである。だからこそ、それは国境を越える世界性を持つ。彼にできることが、日本のアーティストや思想家にできないはずはない。崔健は、ポスト冷戦時代をどう生きるかという手本を、われわれに示してくれたと思うのである。

(社会学者)

いながら、それに気づかない日本の音楽界は、まだ冷戦時代のままなのである。冷戦時代、世界の文化をアメリカが支配した。音楽マーケットも例外でない。アメリカとうまくやってさえいれば大丈夫。そういう前提で、日本はアメリカ・メジャーのレコード会社から音楽ソフトを輸入してきた。ポスト冷戦の時代は、アメリカの一極支配が揺らぐ時代。同時多発的・多方向的に、文化のネットワークが広がっていく時代だ。ワールド・ミュージックとは、そのネットワークの別名である。もちろんこの時代でも、市場がなくなるわけではない。むしろ世界は、単一の市場としてますます拡大していく。でも世界の人口とは、アメリカのマーケットの動向に合わせて音楽を聴くわけじゃない。そのほかにも、いくつものエリアができあがって、多方向的に文化情報を発信していく。そういうアーティスト同士のネットワークが、ワールド・ミュージックなのだ。

日本が属することになるのは、東アジアの音楽マーケットだろうが、そのエリアがいまアジアン・ポップスと呼ばれている。日本人がどれだけよるこんでアジアン・ポップスを聴くかでもって、日本がこれから